

## 聖トマスの存在論における基本的構造 としての containeri<sup>(1)</sup>

L. エルダース

聖トマスの著作が提示する総合的教説はきわめて包括的なものであるため、研究者はしばしばかれの思想の或る特定の側面だけに着目することを余儀なくされる。しかしながら、汎通的な存在論的原理を見落すことはゆるぎされない。この意味でわたくしは、「すべてのものがすべてのもののうちにある」という聖トマスの教えに注目したい。この洞察が主としてどのように適用されているかについて見たあとで、洞察そのものについて分析を試みることにしよう。

### I 活動における containeri

聖トマスによれば、魂はいろいろの異なった存在のレベルにおいて見出される。魂の諸々の類は、次第に増加する数もしくは図形の系列のごときものである。三角形が四角形のうちに含まれているごとく、植物的魂は感覚的魂のうちに含まれている。低次の形相のうちにあるものはなんでも高次の形相のうちに現存する<sup>(3)</sup>。人間の魂は自らのうちに、この世界に見出されるすべての形相的完全性を含んで<sup>(4)</sup>いる。

人間の魂について聖トマスは、その諸部分はたんにとなりあって存在するのではないことを指摘している。その本質をなすものは知的な魂であり、感覚的能力はそこから発生し、またそのうちに含まれている。さらに植物的能力は、感覚的能力から、それがより質料化・具体化されたものとして発出してくる<sup>(5)</sup>。

つぎに感覚的能力に眼を向けると、そこにも相互包含を認めざるをえない。感覚的生命の最低の段階、すなわち触覚は、植物的能力と同じく、体内のいたるところに見出される。触覚は事物をその物体としての現実性において感覚し、また自らの物的現実性のうちに諸要素をあらかじめ含んでいるところから、それらを直接的に感覚する。それゆえに触覚は他のすべての感覚の基礎である<sup>(6)</sup>。このよ

うにして、触覚は植物的生命ならびに自然一般と連結し、他の諸感覚を前もって低いレベルにおいて含んでいる。すなわち「他の感覚はすべて触覚でもある<sup>(7)</sup>」。触覚に対応するのは共通感覚である。共通感覚も他の感覚を含んでいるが、こんどはより高次の仕方においてである。聖トマスが言うごとく、それは外的諸感覚がそこへと合流するところの中心である。そこにおいてすべての外的感覚の知覚がまっとうされる、ということが共通感覚に特有の働きであり、このためそれは第一の感覚的能力と称せられる<sup>(8)</sup>。他の内的諸感覚は、いわば根としての共通感覚から出てくる<sup>(9)</sup>。内的感覚についての聖トマスの所説を注意深く検討すると、かれはこれらの能力を完全に別々の能力であるとは考えず、むしろ共通感覚によって全体として捉えられ、不断に提示されているところの対象について、その或る特定の側面を感覚する能力と見なしていたことがわかる。たとえば、表象力は共通感覚によって集約された諸感覚的要素を再び結合して新しい表象を形成し、この表象を保護する。(感覚的)記憶力はこの表象のうちに、それがかつて捉えられたものであるとの要素を認める。さらに識別力は同じ表象について、それが感覚全体の種的本性にとって適合的なものであるかどうかを識別する。

アリストテレスがなしたのと同じく、聖トマスも、人間の知的認識はすべてまず感覚的認識でなければならないことを主張する<sup>(10)</sup>。しかしながら、知性はその認識の要素を感覚から受取るのみでなく、知的認識はなんらかの仕方では感覚へと立ち帰ることによって完成へともたらされる。聖トマスによれば、知的認識とはたんに感覚的認識から抽象された<sup>スピーキエス</sup>形象ではなくて、感覚と連続していとなまれる認識なのである。人間が思考するときには、表象力も作用していなくてはならない。ところが共通感覚やなんらかの触覚の働きがなければ、表象力の作用もありえない。あらゆる判断の究極的な基礎は、触覚を通じて行われる、実在との直接的な感覚的接触である。ここからして、聖トマスの立場は現代の現象学的実存哲学のそれにきわめて近く、デカルトのコギトが予想する立場からは遠くへだたっている<sup>(11)</sup>。

知的認識は一方において、知性が霊的な仕方では知ることがらを、より質料的な仕方であらしむところの現実の感覚的認識によって伴なわれることを要求するのであるが、他方、人間の霊的な洞察は神に由来するものであり、神におけるすべ

ての事物の真理と連結している。<sup>(12)</sup> このことに関連して、能動知性の役割は特筆にあたいする。能動知性は「なんらかの意味で」、やがて知性にたいして与えられるべきすべての将来の認識を先取している。<sup>(13)</sup> 能動知性はすべての事物の可知性の総体である、と行うことができよう——それら事物の特殊な特徴をもってではなく、より高次の仕方において。<sup>(14)</sup>

聖トマスの哲学においては、人間の知的生命において存在の概念がもっとも重要な役割をはたすものとされている。他のすべての概念は、相互に散漫に連結された、個別的な単位の集合ではけっしてなく、むしろ存在の概念の内部において有機的に発達をとげてゆくものである。すなわち、すべての概念は、存在の概念が内的に制約されることによって成立するものであり、存在の概念がさらに規定されたものにほかならない。<sup>(15)</sup> 諸々の概念が存在の概念のうちにふくまれているのと同様に、諸々の判断は、いわば根元たる第一の判断から発出してくる。第一の諸原理についての認識は一つの統一された習性を形成し、この第一原理の習性は、すべての（そこから発達せしめられる）学を可能的にふくんでいる。<sup>(16)</sup> 聖トマスは、すべての認識と学は、なんらかの仕方人間精神のうちに予め含まれている、と説いて倦むことがない。あらゆる学知は、すでに現存するところの学知から始まる。聖トマスは、新しい認識は獲得されるものというよりは、むしろ本性上、すでに当の認識を有していた全体へとやってくるものである、とすら言っている。<sup>(17)</sup> また別の所において、かれは人間知性は当初にひとつの真理を知り、この真理において他のすべてのことを考察する、と指摘している。<sup>(18)</sup>

トマスは魂の本性、能動知性、第一の概念、第一の判断、第一原理の習性などのうちにすべての認識が統一された仕方存在することを主張するにとどまらない。かれはさらに、諸々の情緒の統一を主張する。いわゆる情念（*passiones*）は情緒生活における根元的実在である。<sup>(19)</sup> ところで、聖トマスによれば、愛は他の諸情念をふくんでおり、後者は、善にたいする人間の態度の特殊化された形態にほかならない。——これよりも高いレベルに目を向けると、意志の働きの全体はなんらかの統一を構成する。このことは第一に、知的生命ならびに意志的生命の発達の間に見られる併行関係に由来する。トマスは、意志の諸々の働きは、或る基本的な態度の諸側面であり、それが次第に特殊化されていったものである、と指

(20) 摘している。人間の意志的生活の統一は、人間のやむことない渴望にてらしてあきらかにできる。すなわち、諸々の有限な価値はけっして幸福への限りない熱望をまったくみだすことはできないのである。——徳の分野においても統一が見出される。諸々の徳は正しい愛の開花であり、この愛の態度が諸々の能力において結晶化されたものにほかならない。賢慮は、人間の生活ならびに課題にたいする、正当な倫理的態度を意味するところから、第一の徳であるといえる。この賢慮の徳がいわば人間存在のより低いレベルにおいて自己を再現し、かくして他の諸々の徳となる。超自然的分野において第一の徳の位置を占めるのは神愛 (*caritas*) であり、この徳は人間にたいして、かれの新しい(超自然的)目的にたいする正しい態度を授け、かくして他の諸々の超自然的徳を含む。<sup>(21)</sup> 第一の判断が知的生命の根であるごとく、人間の倫理的生命は、或る程度まで、かれによる最初の善選択のうちにふくまれている。このような倫理的生命の統一は有徳な行為の場合に生ずるのみでなく、罪深い行動においても認められるものである。すなわち、すべての罪はゆがんだ自己愛の特殊化された形態にほかならない。<sup>(22)</sup>

これまでのべたところから、聖トマスが諸々の働らき、能力、習性、徳について、その統一性を主張していることが確認される。それらはまったく隣接的な実在であると考えすることはできない。むしろそれらは或る基本的な所与が次第に特殊化され、質料化されていったものである。それらのものは前もって実体的存在のうちに含まれていたところのものを、表面へと浮び上らせ、作用させるものにほかならない——スコラの公理にあるごとく「働らきは存在に随う」のである。

われわれはつぎに存在のレベルにおける *containeri* の考察にうつらなくてはならない。

2 人間によって認識される実在の基本的側面は変化ないし過程である。トマスはアリストテレスにならって、自然界における因果の関係のうちに四種の原因を認めることができる、と主張する。<sup>(23)</sup> 第一は目的因であり、これは作用因を通じて、またそのうちにおいて働きをなす。作用因は一定の質料に働きかけて、それにおいて、またそれらの、新しい存在をつくりだす。アリストテレスの原因説にまったく賛同するトマスにとって、作用因果性の真の典型は神の創造活動である。すなわち、神はその完全性の充溢せる善性と愛からしてこの世界をつくりだす。

この創造において、目的因は他の原因の働きを含み、かつ導びく。創られたるものにおける働きは、それらの形相にしたがい、そしてこの形相のゆえに質料が与えられる。まことに、トマスがしばしば指摘しているごとく、質料は形相のうち(24)に含まれている。神からの事物の発生において、諸々の原因の交錯の完璧な例が見られる。(25)

神的原因の働きは、あらゆる種類の被造的原因の働きを含み、遂行し、かつくりだす。トマスは第一次的原因がすべての第二次的原因のうちに作用しており、後者は存在の産出においては、第一原因に仕えるところの道具的原因と見なさるべきことを強調して倦むことを知らない。(26)

このほかにも、いまひとつの諸原因の交錯が見出される。トマスによれば世界はばらばらな諸実体の集合ではなく、ほとんど有機的ともいうべき統一を有するものであるから、この世界のうちに見られる多様な因果の過程は、神に従属するところの、ただ一つのより高次で、すべてを包括する被造的因果性において統一されているのでなくてはならない。聖トマスはこのような宇宙的因果性をたえず指定しており、これを第一天もしくは太陽に属するものとしている。この宇宙、普遍的因果性が事物の種の本性をつくりだす。(27)宇宙的過程はこの一般的原因の働きかけによるものである。おそらくこれを世界におけるエネルギーの総量にあたるものと見てよいであろう——しかし、その場合には、生命体における高次の形相をも生みだしうるような、生物の分野におけるエネルギーもそこにふくまれてくる。聖トマスの考えによると、人間のごとき存在の産出は、複雑な宇宙的過程によるものである。そこにはいくつかの特殊な原因が作用し、それらがこの種を産みだしうるよう調和的に協働しなくてはならない。神に従属するところの、世界の普遍的因果性は、諸々の特殊的原因の働きを含み、かつ導びく。(28)一般的に言って、あらゆる原因の秩序において、普遍的原因は特殊的原因に先立つものでなければならぬ。けだし、特殊な諸原因は、一般的原因の力によるのでなければその働きをなさないからである。(29)

トマスにとって、事物の総体は相互に連関のない諸実体の集合ではありえなかった。宇宙には段階がなければならず、諸々の種は数列における相隣する数のごときのものであった。(30)トマスにとっては、いまだ宇宙は閉じられた全体と考えられ、

そこにおいては第一天が他の諸天球を含み、それらの運動の原因であると考えられていたところから、上のごとき形而上学的理論を主張し、これを例証することは容易であった。<sup>(31)</sup> 宇宙の同心的な諸天球にとって固有的なものと思われる四元素は、あらゆる地上的物体を構成する素材であるとされ、それらにおいて潜勢的に存在しつづけると考えられた。トマスはアリストテレスにならって、天上的な諸物体の運動がすべての場所的運動、変化、ならびに成長の原因であると見なした。<sup>(32)</sup> このように、トマスの宇宙像によれば事物は上下秩序的な構造を有する。

全宇宙が調和的全体であるごとく、個別的な実体も基体とその附帯性との総体以上のものである。質料的実体にとっての根本的附帯性は量であり、質は量を通じて基体に内存在する。基体の固有的本性、大きさ、性質などが関係の基礎である。自らのうちに形相と質料をふくむところの基体は（形相のゆえに）能動的であり、（質料のゆえに）受動的である。さらに、基体が宇宙のうちに組みこまれていることのゆえに、場所ならびに時間がそれにたいして与えられる。一番最後にくる附帯性、すなわち所属 (*habitus*) と称せられるものは、衣服や靴を着けている、といったように、実体を附帯的に規定するものである。その役割は、二つの実体間の人為的なつながり、ならびにそれらの統一を表現することである。

上述のところから、存在のカテゴリーは動的な性格を有することが結論される。それらは、相互において、また相互を通じて実体から出てくる。実体はすでに実体の秩序において、諸々の附帯性が附帯性の秩序において与えてくれるべきものを含んでいる。したがって附帯性はなにか完全に新しいものではない。それらは、すでに実体のうちに内含されているところのものを、宇宙・時間・空間において明示するものである。

聖トマスによれば、（すでに神学に関連してのべたごとく）このような *contineri* は超自然的秩序においても存在する。すべての信条はなんらかの仕方で、神の存在ならびにその摂理の肯定のうちに含まれている。<sup>(33)</sup> 倫理の領域においては、すべてが神学に依存している。秘跡の秩序においては、聖体の秘跡は他の諸々の秘跡を含んでいる。<sup>(34)</sup>

3. つぎにわれわれは、聖トマスがこのように事物の内含を主張する究極の根拠はなにか、という問題に眼を向けることにしたい。

第一に考えられることはつきのごとくである。われわれは諸々の事物の間に類的な共通性を認める。たとえば、諸々の動物はさまざまな仕方において認識能力を分け持っている——或るものは極めて完全な形における感覚的認識を有し、他のものはいわば認識の入口に立つにとどまる。プラトンやアリストテレスにならって、トマスもこのことについて省察し、すべての類において第一のものがなければならず、このものがその類におけるすべてのものの規準である、との原理をたてている。<sup>(35)</sup>これとはいくぶんちがった表現として、或る類において最大なるものが、その類におけるすべてのものの原理である、とも言っている。<sup>(36)</sup>この原理は観察に基づくとともに、推論の結果でもある。たとえば低温の熱が太陽から来るものであり、植物や動物から種（精）子が出てくるように、自然界においてはより不完全なものが完全なものから発出する。<sup>(37)</sup>さらに、現実態にあるものは可能態にあるものに働きかける。ところで、より完全なものがより不完全なものに対して有する関係は、現実態が可能態にたいして有するそれであり、したがって後者にたいして働きかけるのである。<sup>(38)</sup>この原理の理論的基礎は、或る類的本質が異なった種の形相のうちに見出されるについては、その根拠がなければならぬ、ということである。あきらかに類的本質がそれらのものにおいて異なった仕方でも有されている。もしもそれぞれの種が自分だけで類的本質を有していたならば、類的共同性もなく（類的本質の）部分的な実現ということもなかったであろう。

しかしながら、*contineri* に関するトマス説の究極の基礎にあるのは包括的な形而上学的関心である。中世哲学は、一者からいかにして多様性が生じうるか、という問題と取組まなくてはならなかった。アリストテレスはさりげなく、一から生じうるのは一のみである、とのべている。新プラトン哲学ならびにアラビア哲学において、第一原理からの事物の流出、もしくは神による創造は中心的位置を占めている。プロクロスは形而上学的努力は、最高の原理の原因としての働きかけが、いかにして存在の種々のレベルにおいて多様化されるかを示す、ということにすべて傾注されていた。アヴィケンナは諸々の存在の多様性を、神の創造活動の多様性からではなく、いわばそれが宇宙において同心的に拡大せしめられているということから導びきだしている。

聖トマスは第二回目のバリー滞在中に、奇異な内容の「原因論」を徹底的に研

究し、この問題についてのかれ自らの解決をみだした。すなわち、多様性の根拠は、神の知性によって認識されたかぎりにおける、神の本質の豊かな充溢のうちに<sup>(39)</sup>ある。多様性の第一の根拠は受取るものうちではなく、神のうちにある。トマスはこれに付け加えて、神においてはすべてが至高なる統一と単一さをもって存在しており、思惟と実在、英知と愛は同一である、とのべている。被造的存在も、神を模倣することにおいて、なんらかの意味においてすべてでなければならない。

これは、たとえば質料的な事物はすべてを質料的な仕方、つまり、限定された仕方において、また、現実的によりはむしろ可能的に所有する、という意味に解しなくてはならない。霊的実在はすべてをより高次の仕方を含む。しかしながら、この *containeri* は、存在の段階においてもその表現を見出す。すなわち、神は調和的な結果をもたらすにさいして、讃嘆すべき英知をもってその働きを遂行する。このような事物間の関係は、観察からも引き出すことができる。自然界においては、低次の植物的生命から高次の感覚的生命へといたる段階的移行がある。高等な動物における植物的および感覚的能力のより大なる完全性はこのことをあきらかに示す。この段階的上昇は、因果性の増大を伴っている。すなわち、より高次の存在は低次の存在にたいして原因としての働きかけをなす。

上述のところから、'*containeri*' および '*containeri*' は聖トマスにとって、まさしく実在の構造の特徴を示すものである、と結論できる。じっさい、そのことはかれの著作のいたるところにおいて、'*containeri*'、'*praehaberi*'、'*esse in*' などについての叙述が見出されることによっても明らかである。一方において、聖トマスが新プラトン哲学ならびにアラビアの哲学に出会ったことが、かれがこの点について思索することを緊急ならしめたとしても、他方、われわれは、かれがじっさいに形成した説はきわめて独創的なものと思われ、またそれは、すべてのものが神の善性によって創造されたということについてのかれの洞察からの論理的な結論である、と言わなければならない。

(稲垣良典訳)

## 註

- (1) 本稿は南山大学において開催された日本中世哲学会・第十四回大会におい



て行なった発表の要旨である。

- (2) この命題はプロク羅斯のうちに見出される。参照。 Liber de causis. lectio 12. トマスの著作におけるこの思想を考察するにさいして、われわれはたんにそこでくりかえし用いられている *continuatio*, *continere*, *contineri* 等の用語のみならず、*praehabere*, *esse in*, *primus* 等の用語にも注目しなければならぬ。
- (3) *Quodl.* 11, 5, art. *unicus*.
- (4) I, 76, 4 ; *De causis*, lect. 14, 299.
- (5) I, 77, 7.
- (6) *De anima* III, lect. 3, 602 ; lect. 17, 849 ; lect. 18 ; II, lect. 6, 300 ; lect. 23. *Met.* I, lect. 1, 9
- (7) *De anima* II, lect. 19, 481.
- (8) *Ibid.*, III, lect. 12, 773 ; 768.
- (9) *De memoria*, lect. 2, 320.
- (10) *De anima* III, lect. 13, 791.
- (11) *Exp. in Boetii de Trinitate*, lect. 2, q. 2, a. 2, ad 5.
- (12) S. C. G. II, 84 ; *Comm. in Joan.*, prolog. ; *Ver.* 22, 2 ad 1 ; I, 88, 3 ad 1.
- (13) *Ver.* 10, 6 : *quodammodo omnis scientia originaliter indita*.
- (14) *De anima* III, lect. 10, 728 ss.
- (15) *Ver.* 1, 1.
- (16) *Quodl.* 8, 2, 2.
- (17) *Met.* IV, lect. 6, 599 ; *Anal. post.* I, 1.
- (18) *Exp. in Boetii de Trin.* 6, art. 1, ad 3.
- (19) I-II, 25, 1-2 ; *De virt. in communi* 12, ad 9.
- (20) *Ver.* 23, 1 ; I-II, 10, 1.
- (21) I-II, 57, 5 ; I-II 65, 2.
- (22) In 1. *Sent.* II, d. 42, 2 ad 1 ; *De malo* 8, 1 ad 19.
- (23) 形而上学のレベルにおいては、まったく新しい型の因果性として、存在 (*existence*) の因果性を付加することができよう。参照 E. Gilson, *Avicenne*

et les origines de la notion de cause efficiente, in *Atti del XII congresso intern. di filosofia*, vol. 221-23.

- 24 In *phys.* III, lect. 12, 391 ; I, 76, 5 ; I, 75, 5 ad 3.
- 25 I, 44, 2 ad 3 ; I. 44, 4 ad 4.
- 26 *Exp.* in 1. de *div. nom.*, 5, 2, 560.
- 27 或る原因は子孫を産出するにさいして、自己の種の本質そのものをつくりだすことはできない、そうすることは、自己をつくりだすにひとしいであろう。
- 28 *Exp.* in 1. de *causis* II, lect. 2, 58 ; III, lect. 3, 77 ; 1. de *div. nom.*, 4, lect. 21, 550 ; I, 45, 8 ad 3 ; S. C. G. III, 99 ; IV, 7 ; III, 65 ; II, 21 ; S. T. I, 13, 5 ; 79, 4 ; 104, 1.
- 29 *De subst. sep.* c.7, 50.
- 30 I, 76, 3, 4
- 31 In *de caelo* I, lect. 4, 42: *omnium corporum contentivum*.
- 32 In 1. de *causis*, lect. 31.
- 33 In *phys.* III, lect. 5, 322 ; I, 77, 4 ; I, 77, 6 ; In 1. de *causis*, lect. 14, 298.
- 34 *Comm. super Matth.* 22.
- 35 *Ver.* 23, 7.
- 36 I. 2, 3.
- 37 S. C. G. I, 28.
- 38 In 1. de *causis*, lect. 4, 129.
- 39 *Ibid.*, lect. 24.